



スクールリーダーによる「実践研究」 —— 理論知・実践知の内的対話 ——

概要

本稿では、実践者による「実践研究」について考察する。実践研究は、実践をテーマ化し、その内容・組織・過程を記述し、実践の課題解決や意味づけを行う取り組みと定義する。広義の実践研究には、実践報告・実践記録、学術論文、実践研究論文の三種が含まれ、研究主体として研究者と実践者が上げられる。ここでは、実践当事者が取り組む実践研究論文について検討する。この実践研究論文は、実践の省察と理論的照射を交錯させる（理論知・実践知の対話）中で生み出されるものである。なお、スクールリーダーとは学校づくりの中核を担う教職員をいう。

1. 実践研究の論点整理

(1) 実践研究への関心の高まり

- 実践研究は多義的
- 定義：実践をテーマ化し、その内容・組織・過程を記述し、実践の課題解決や意味づけを行う取り組み
- 2000年前後から研究者の臨床研究、実践研究への関心の高まり
- A. 学校経営学分野 日本教育経営学会研究推進委員会編『学校経営研究における臨床的アプローチの構築—研究・実践の新たな関係性を求めて』2004年、『学校組織調査法—デザイン・方法・技法』2010年 など
- B. 教育心理学分野 『心理学と教育実践の間で』佐伯胖他編、1998年、『教育心理学の新しいかたち』鹿毛雅治編、2005年 など
- 社会的背景：①教育問題が複雑化・深刻化し総合的把握の必要性、②研究の実践性・有効性の重視、③臨床研究、アクションリサーチ（AR）、フィールドワークの方法論の探究

(2) 研究と実践の関係づけ

- 研究と実践との乖離 研究における実践性を問う
- 研究と実践との関係づけ
- A. 理論を実践に適用 Theory into Practice
- B. 実践の理論を構築 Theory on Practice
- C. 実践者の実践知を解明 Theory in Practice

(3) 実践研究に取り組む研究者の活動

- 実践活動（機能）の視点から4分類（大脇、2011）
実践を「知る」と「創る」こと
A. 情報提供活動、B. 実践分析活動、C. 問題解決支援活動、D. 実践報告支援活動
- 学術研究の方法・スタイルで研究論文を作成

(4) 実践者による実践研究の探究

- 研究者による実践研究について考察した論文 増加
- 実践者による実践研究について考察した論文 少数に止まる
- 教職大学院における実践研究報告の増加、それを枠づける指導理論が必要

2. 「実践者による実践研究」の先行例

(1) 福井大学教職大学院の「実践研究」「学校改革実践研究報告」（長期実践報告）

- 「学校拠点方式」による学び
- 拠点校での協働実践と大学院での対象化
- 「実践→省察→再構成」サイクルによる理論と実践の融合
- 自己の実践と役割を時系列的に振り返ることが基本
- 実践報告は、緩やかなテーマの下、実践経験をまとめることを重視、論理性・体系性が課題、分量は多い
- 教師としてのアイデンティティの再構築に資する

(2) 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの「実践研究」「実践研究型論文」

- 実践者による「実践研究」の定義
 - 「実践者が自らの実践活動を対象化し、その意味づけや課題解決を行う研究」（杉澤経子 2011）
 - 研究者による「学術研究論文」と対比して、実践者による「実践型研究論文」を独自に位置づけ
- 「実践研究」の要件を明示
 - 自己の実践活動が研究対象
 - 自己の実践経験のプロセスを記述
 - 課題解決が目的
 - 論文執筆のマナーや体裁の習得
 - 実践に基づいた専門性の導出（杉澤経子 2011 p.34）
- 当事者が自らの実践を対象化し意味づける方法・過程を重視
- 実践者が論文執筆に取り組む段階論を提起
 - 1000字→4000字→10000字
- 実践者は多文化共生コーディネーター、属性は多様

(3) スクールリーダー・フォーラムの「実践報告」から スクールリーダー実践研究賞の「実践研究論文」へ

- スクールリーダーによる学校づくりの「実践報告」
 - スクールリーダー・フォーラム（大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪府教育委員会合同プロジェクト）のラウンドテーブル
 - コンセプトとストーリーを描く、学校づくりの活動・組織・過程、成果と問題点、実践者の役割・活動、基礎データを含む
 - 内容構成、記述方法 参照例は示すが自由、分量は2000字
 - ラウンドテーブル方式でじっくり「物語る」「聴き取る」
- スクールリーダー実践研究賞の「実践研究論文」
 - コンセプトの深化とストーリーの展開
 - 分量は4000字、2倍
 - フォーラム報告者が「実践報告」をグレードアップして応募、機関審査を経て受賞論文の決定
- 「実践研究論文」の特徴
 - 実践者の属性（職位・役割、校種・地域）の多様性、テーマ・実践内容の多様性
 - 実践者・学校現場の言葉、実践に即した記述・表現がみられる
 - データの裏付け、社会的文脈、組織と個人の変容などの記述が課題

(4) 夜間大学院スクールリーダー・コース（SLC）の「理論知・実践知対話型」の「実践的研究」「実践的研究論文」

- 夜間大学院で「働きながら学ぶ」現職教員院生
- 研究テーマ・対象・方法の連関を重視
- 主要な先行研究をふまえたテーマ設定
- 比較できる実践事例を選定して、自らの実践と比較検討
- 研究論文の形式・ルールに準拠する
- 分量は1枚（40字×40行）で50～70枚、『学校教育論集』（2005～2014）は50頁以内

3. 実践者による実践研究の論点

(1) スクールリーダーによる「実践研究」

定義：スクールリーダーが、学校づくり実践をテーマ化し、その内容・組織・過程を記述し、実践の課題解決や意味づけを行う取り組み

・「実践研究論文」の基本的要件

- ①学校づくり実践をテーマ化する(明確な問いを立てる)
- ②実践の方法と過程を記述する(葛藤や課題も取り出す)
- ③自己の役割と活動を位置づける(個人と組織を関係づける)
- ④学校づくりの課題解決やその意味づけを考察する
(個別性と一般性に論及する)
- ・そのための必要条件
- ⑤主要な先行研究(学術論文)を検討し、テーマを焦点化する
- ⑥比較可能な事例を選定して、自己の実践と比較検討する

(2) 当事者による実践研究の意義と困難さ

(意義)

- ・実践者自身が実践の認識地図と変容過程を明らかにする
- ・実践者の意図と感情を総合的に把握できる

(困難さ)

- ・実践は教職員の位置・活動・関心によって多様に認識されるが、当事者には多面的に把握できない。独自の研究作業が必要不可欠
- ・実践の複雑性・多様性を単純化・簡素化して認識するためには、一定の研究手法・手順に習熟することが必要
- ・実践研究の成果を論文としてまとめるための基本やルールに準拠する必要

(3) 実践と理論の関係づけ 多様なパターン

A. 実践を現場の言葉・知見を整理する方向でまとめる。

→ 実践知、経験則の世界を重視して記述する：「持論」「物語る」

B. 実践を省察すると共に、理論的に照射する作業を通して、実践を再構成する方向でまとめる。

→ 理論知と実践知の内的対話

4. 実践者と研究者による「協働実践研究」

(1) 理論知と実践知の内的対話

- ①実践知「実践経験を通して得た経験則、カンやノウハウを含む実践的知見・知恵」
 - ・特定の学校や行政の社会的文脈に規定、形式知＋暗黙知
 - ・多様性、多元性、曖昧さを持つ、経験と判断に基づく
- ②理論知「論理性・体系性を志向し、現象を説明し予見する命題からなる」
 - ・現実を理解し説明する概念と枠組を提供
- ③実践知と理論知の連関
 - ・理論と実践、思考と行為、分析と意思決定の葛藤・ジレンマ
 - ・理論知と実践知の新たな関係づけ(対話)を行う契機
 - ・理論知と実践知の階層化と連関

(2) 理論と実践のスパイラル学習

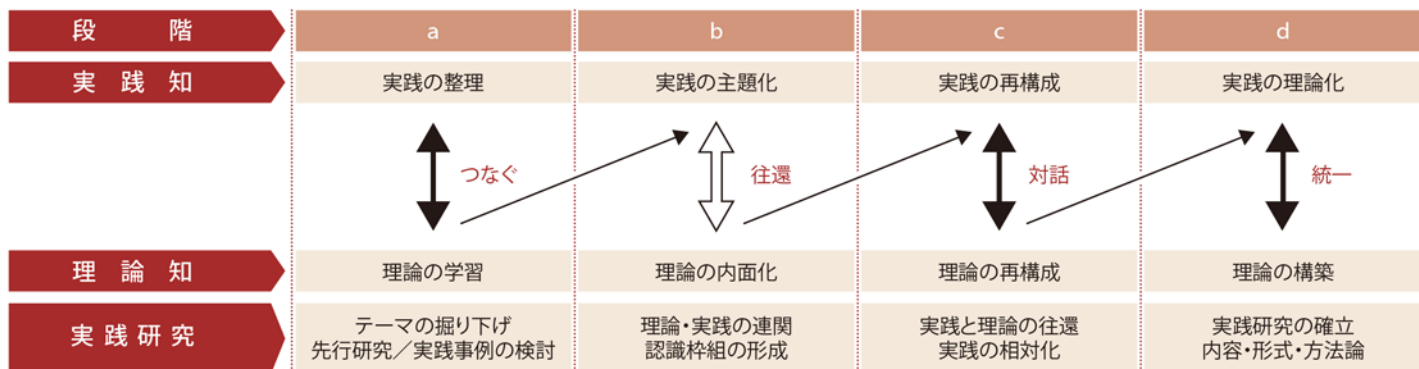
- ・実践者としての実践的・状況適応的思考とクロスさせる形で、理論的・実証的思考を形成
- ・「理論の意識化と実践の対象化」

(3) 実践者と研究者の協働実践研究

- ・教職大学院の実践研究報告を深化させることが課題
- ・実践者と研究者の協働実践研究
- ・大阪教育大学の取り組みを基礎に、福井大学の学校拠点での協働研究の活動を参照し、東京外国語大学の協働実践研究を発展させる
→「新たな実践研究」の展開



写真 実践研究に取り組むスクールリーダー



参考文献

- ・秋田喜代美、キャサリン・ルイス編『授業の研究 教師の学習』明石書店、2009
- ・東アジア教員養成国際共同研究プロジェクト編『「東アジア的教師」の今』東京学芸大学出版会、2015
- ・金井寿宏・楠見孝編『実践知』有斐閣、2012
- ・森透「福井大学教職大学院における学校拠点方式と学びのサイクル」『スクールリーダー研究』第5号、2014
- ・大脇康弘「学校評価における研究者の役割—理論知と実践知をつなぐ実践的研究者—」『学校経営研究』第36号、2011
- ・杉澤千子「実践者が行う『実践研究』の意義とあり方」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』No.14、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、2011